

# 国語科における中高接続カリキュラム研究

－高校国語学習の導入期における教師の働きかけ－

M11EP002

遠藤 祐也

## 1. 実践研究の目的

内閣府発表の「高等学校中途退学者の意識に関する調査」(2011) 結果によると、高校中退時の学年の最多が高校1年生で全体の44.2%、理由として、「勉強がわからなかったから」が48.0%と高い割合を示している。

この結果から高校での学習における問題が生徒のつまずきの主たる要因の1つになっていることが予想される。そこでまず高校1年生を対象とした高校生活や英数国の学習に関わる調査を実施し、高校入学間もない生徒が、日ごろの学校生活や学習をどのようにとらえているのかという観点を得たいと考えた。

そのうえで、調査で得られた観点をもとにして高校、中学校の実習で授業観察を行い、中学校から高校にかけて生徒が感じるつまずきや戸惑いは何に由来するのかということ考察し、高校導入期の学習指導において注意を要する観点を得る。そして中学校から高校へのスムーズな学習の接続を図るための教材開発・授業開発を試みることにした。

## 2. 「高校生活・基礎科目 実態意識調査」

### (1) 実施状況

**調査時期**：平成23年6月6日～10日

**調査対象**：県立A高等学校1学年(7クラス)

有効回答数：278人

**対象校の実態**：地方都市部に位置する進学校。  
4割が国公立大学に進学する。

**調査方法**：質問紙法による。各クラス担任に依頼し、質問紙の配付・回収を行った。調査項目は自作およびベネッセコーポレーション「スタディーサポート 学習状況リサーチ」

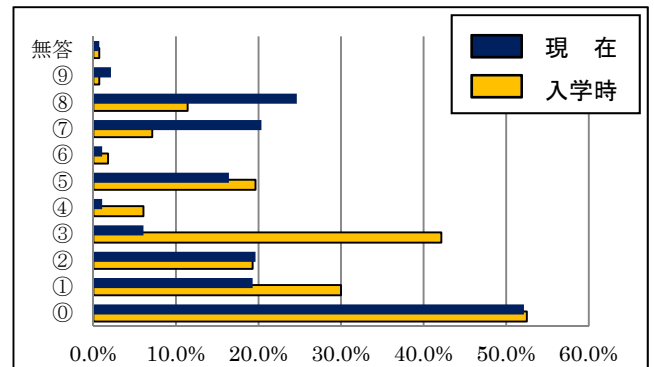
を参考にした。

### (2) 質問項目と調査結果(一部抜粋)

(質問項目は複数回答を可とした)

- ①高校入学時と2か月经過した現在の高校生活についての気持ちに近いものをそれぞれ選んでください。
- ②高校に入学して中学校とは違うなと感じていることに最も近いものは何ですか？
- ③英数国の教科について、学習する上で最も悩んでいることは何ですか？
- ④国語の次の分野のうち、苦手だ(わかりにくい)と思うものは何ですか？

質問①調査結果(図1)

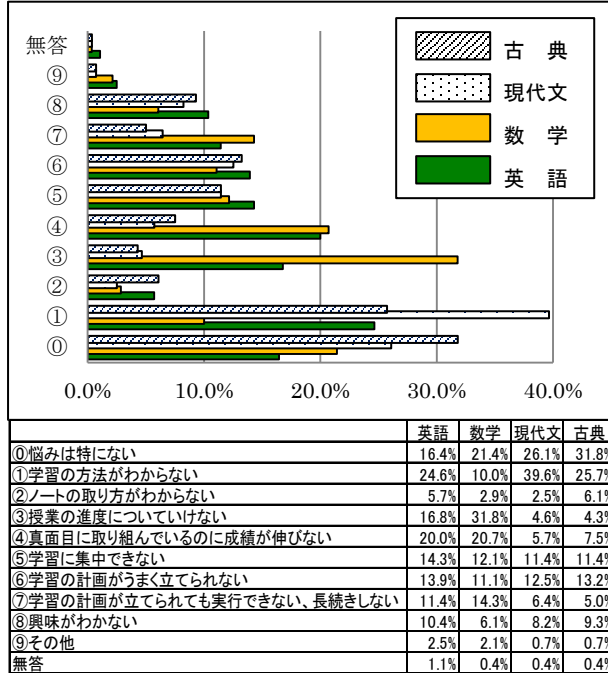


	入学時	現在
①勉強が難しくなり授業の進度についていけるか不安	52.5%	52.1%
①勉強と部活動の両立ができるか不安	30.0%	19.3%
②学習や生活などリズムがうまく保てるか不安	19.3%	19.6%
③クラスメイトと人間関係が築けるか不安	42.1%	6.1%
④先生や先輩と人間関係が築けるか不安	6.1%	1.1%
⑤周囲の人たちが優秀に見えて不安	19.6%	16.4%
⑥勉強するのが楽しみ	1.8%	1.1%
⑦部活ができるのが楽しみ	7.1%	20.4%
⑧勉強や部活など学校生活全てが楽しみ	11.4%	24.6%
⑨その他	0.7%	2.1%
無答	0.7%	0.7%

質問②調査結果(図2)

①特に違いは感じない	2.9%	①学習内容が難しい	53.6%
②授業の進度が速い	50.0%	③予習復習など忙しい	44.6%
④課題(宿題)が多い	45.4%	⑤部活動がハードだ	6.4%
⑥通学に時間がかかる	16.1%	⑦人間関係が濃密だ	1.1%
⑧人間関係が希薄だ	3.9%	⑨その他	1.4%
無答	0.4%		

質問③調査結果（図3）



質問④調査結果（図4）

①特に苦手はない	3.9%
①現代文の語彙・語法	8.6%
②漢字	18.6%
③現代文の読解	46.1%
④文章で表現したり記述したりすること	37.1%
⑤古文の文法	28.2%
⑥古文単語	18.6%
⑦古文の読解	43.6%
⑧漢文の読解	11.8%
⑨その他	1.8%
無答	0.4%

### （3）考察

図1から入学して2か月経つことで人間関係の不安が大幅に減少し、高校生活への期待感が高まる一方で、学習事項の難化・授業進度への不安が軽減されていないことがわかる。図2からも生活面よりも「授業内容の難化」、「授業進度の高速化」といった学習面に関して中学との違いを感じている生徒が多いことが歴然とした。こうした学習面の変化が、生徒にとって不安要素になっていると考えられる。図3からは国語学習に関して悩みがないと回答する生徒の割合は英語数学よりも多い反面、「学習の方法がわからない」と回答した生徒が、特に現代文において多いことがわかった。図4からは、「現代文の読解」、「古典の読解」において苦手意識を感じている生徒が多いことがわかった。

また、本調査において自由記述の形式で「国

語（現代文・古典）を学ぶ意義」について質問したところ、特に古典において「学ぶ意義がわからない」という趣旨の回答をした生徒の割合が全体の3割（現代文の約3倍）に及ぶことも明らかになった。

上記の分析から次の3点が明らかになった。

- i) 生徒は高校での学習面において、中学との違いや不安を感じている。
- ii) 国語と英語・数学を比較すると、国語学習の方法や学ぶ意味（特に古典分野）がわからない生徒が多い。
- iii) 国語の教科内容では現代文・古典の読解分野に苦手意識を持つ生徒が多い。

こうした認識をもたらす中高の授業とはどのようなものか、この3観点为学校現場の状況とどのように関連するのかを明らかにすることを観察の視点とし、以下の実習を行った。

### 3. 実習を通してみた接続上の問題点

#### （1）実習の概要と期間

##### B高校（5～7月）

県立の普通科進学校。120時間の実習を行った。1学年の国語科の授業を担当している2名の教員の授業を観察。

##### C高校・C中学校（9～10月）

市立の中高一貫校。地域を代表する進学校。42時間の実習を行った。高校1年生と中学3年生を兼任する高校所属の教員1名の授業を観察した。さらに中学3年生を担当する中学所属の教員の授業も数回観察した。

##### D中学校（11～12月）

国立大学の附属中学校。真面目な生徒が多く、習熟度は高い。48時間の実習を行った。3学年全クラスを担当する1名の教員の授業観察を中心に行ったが、12月に12時間、漢文の授業実践を行った。詳細は後述する。

#### （2）実習から得られた知見

##### ①授業方法

大別しすぎるきらいはあるが、端的に言うところ「高校の教員の授業は教師主導型、中学の

教員の授業は生徒主導型」である。これは今回実習に行ったすべての学校に共通する。具体的に述べると、高校教員による授業は知識伝達型であり、教師はそれぞれの授業の中で教材に関する一定の見解や読み方を生徒に提示していた。生徒の活動は限定され、生徒相互に自分の意見を述べたり、他者の意見を聞いて自分の中で統合したりするといった活動はほとんど見られなかった。

中学校教員による授業は、教員の発言は必要最小限にとどめ、生徒が自分の解釈に基づいて教材を分析し、それを生徒相互の比較を通じて異同を整理するというオープンエンド型の授業が多かった。生徒は授業に積極的に参加していると感じられる一方で、知識や理解が授業内でどの程度深まったのか把握しにくいのではないかという印象を持ち、教材活用の余地はまだ残されていると感じた。

### ②授業進度

中学校では教科書の1ページ程度の分量を1時間から2時間費やしてじっくり取り組む場面が多々あったり、板書も1時間の授業で半面から1面程度の分量であったりと、高校教員のそれらと比較すると大きなギャップがあると感じた。

### ③学習内容の難度

中学の教科書(M社)を見ると、脚注の丁寧さに気がつく。これは古典分野において顕著であり、生徒は教科書の脚注をつなげればそれなりの解釈が可能となる。古文では現代語訳が、漢文では書き下し文があらかじめ付されている。教材の絶対数も少なく、文法分野もほとんど扱われない。ところが、高校になると、素材数・文章量とも増加し、特に古典においては古語辞典や文法書と格闘することになり、予習復習が授業の大前提となる。

以上のように中学校と高校では授業の方法、進度、内容と大きく変わる。前述の調査では中学段階で5%前後の生徒しか家庭学習の習慣がなかったことも明らかになったが、高校

では当たり前のように、予習や復習を求められる。わずか2か月でこの差というのは高校入学間もない生徒たちにとって不安材料となるのも頷ける。また、前述3観点のうち、ii)の国語学習の方法について、B高校の生徒8人にインタビュー調査をした。要約すると、古典については予習段階で現代語訳をするくらいのはできるが、特に現代文となると日頃どのような学習をすべきかわからないという回答を全員がしていた。調査校とは異なるB高でもA高と同様の状況を窺い知ることができた。ただし、現代文の予習を明確に指示している教員のクラスではその指示に基づいて生徒がノートに予習をしていたので、教師からの明確な働きかけが必要であるということを感じた。この働きかけはiii)の古典を学ぶ意義についても同様であり、生徒が古典を学ぶ意義を感じられるような教師からの働きかけが必要であり、学ぶ必然性を生徒が感じることで学習動機につながるものと考えられる。

## 4. 中高の接続を意識した授業の試行

前述のように、高校教員と中学教員では授業スタイルやねらいが異なり、どちらも一長一短がある。D中学校での授業実習をするにあたり、中学校の生徒相互の学びあいの学習と高校の一定の知識に基づいた深い教材理解の学習の折衷により両者の接続を円滑にできないかと考え、試行的な授業を行った。

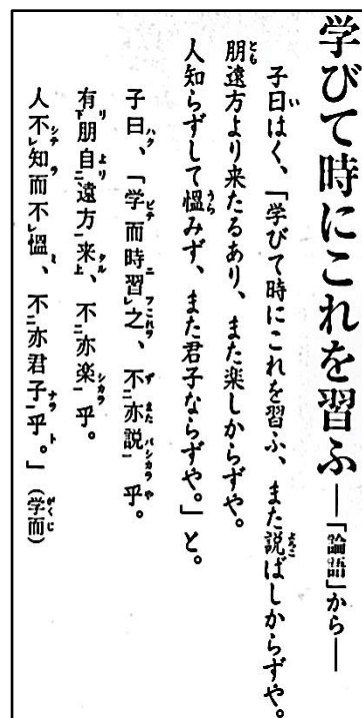
### (1) 対象・教材

対象：3年生1～4組  
教材：光村図書 国語3

「学びて時にこれを習ふ—『論語』から—」

### (2) 授業構成上の工夫

観察で得た知見を踏まえ、高校型の授業を取り



教材 該当部分

入れつつも、中学国語の主たるねらいである「古典への興味関心の喚起」を図るべく、次の3点を意識した授業を行った。

- ①漢文を学ぶ意味づけを明確にする
- ②語彙・語法に即した“正しい解釈”を教師が最終的に提示する
- ③生徒相互の学びあいを喚起し、解釈からさらに深部を読み取らせて内容を一般化する

### (3) 授業の流れ

①漢文学習の意味づけ（漢字・漢文が日本語に及ぼした影響など）→②音読学習→③本文解釈→④学びあいを通じた本文読解

【概要】「学んで習う（体得する）こと」がなぜ「喜ばしいこと」なのかという問いを投げかけ、「学」「習」の意味内容が追究のヒントになることを伝え、グループ学習・発表を行った。グループリーダーを中心に、それぞれの生徒が自らの見解を述べ、他者の意見を参考にしながら、グループの結論をまとめようとする積極的な姿勢が随所で見られた。

### →⑤まとめ

【概要】「学」は「教えを受けること」、「習」は「受けた教えを復習して体得すること」という意味を持つことを字源的な観点から説明し、生徒自身の日常の学習に敷衍して、わからなかったことがわかり、できなかったことができるようになるという学習の喜びを跳び箱の例を用いて説明。さらに、日本が縄文弥生時代の頃にすでにこうした哲学的思想が中国にあり、2000年以上経った現代でも全く古臭さを感じないという話をして授業終了。

以降同様の展開で授業をし、単元を終えた。

### (4) 生徒アンケートより

この授業に対する授業アンケートを実施した。回収数135、約90%の回収率であった。

**質問1**：『論語』の冒頭文には孔子のどのような考え方が表れていると理解しましたか？  
一単なる解釈だけにとどまらず、授業で取り扱った「学」と「習」の両者を踏まえて学習の本質について言及した回答が多く寄せられ、

深い教材理解ができていることがわかった。

**質問2**：授業を受けて思ったこと、感じたこと、何でも構いませんので、書いてください。

「ほとんどの生徒が楽しく授業を受けることができた」と回答している。中には「漢文は見るだけで嫌だったが、学び方によってはこんなに分かりやすく楽しいことがわかった」

「今回の授業のように一つひとつの意味を確認しながら深くまで読み取ることで古文の面白さが伝わった」「論語がこんなに面白いとは思わなかった」「他の論語も読んでみたいと思う」「中学の授業が高校に通じているなと思った」といったように、古典学習への興味関心や高校国語の内容につながったという感想が多く寄せられた。中には「生きるうえでの信念を考えさせられた」とより高次の段階で授業の振り返りをしている生徒もいた。

その一方で、「授業の進度の速さ」を指摘する意見が数人から寄せられた。特に授業を速く進めたという意識はなかったので、改めて授業進度に対する注意が必要であると考えさせられた。

## 5. まとめ・今後の研究に向けて

中学校型授業と高校型授業を折衷した授業実習は、教師側が意図したこと以上に生徒たちが古典学習への興味関心を持てたという点で有効であったといえよう。こうしたある程度の前提知を教師が提示したうえで生徒相互の学びあいを取り入れた授業や、折に触れて学ぶ意義を教師側から語りかけていく授業は高校でも十分実践可能であると考えられる。今回の研究で得られた知見をもとに、今後は高校1年生を対象に授業実践を行い、中高接続上の有効性について検証したい。

## 6. 参考文献

- 「ベネッセグレイサポート 学習状況リサーチ」
- 「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）」内閣府（2011）  
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/school/kaisetsu.html>